

格調高い句で 多くの文化人を魅了した 俳人 飯田蛇笏

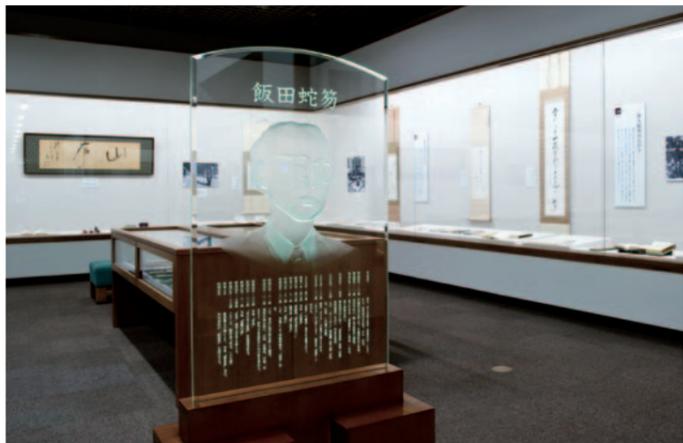


近代俳句界を代表する俳人

いいだだこつ
飯田蛇笏 1885年～1962年

十七文字で山梨の風土と自然を詠い上げた、俳人、飯田蛇笏。山梨の自然の中での暮らしから生み出された孤高で重厚な俳句は、俳人はもとより多くの文化人を惹きつけ、作家、芥川龍之介とも作品を通して深い交流があった。

飯田蛇笏の足跡



飯田蛇笏・龍太記念室

自筆の句の掛け軸、原稿、主宰した俳誌や愛用品などを展示。平成22年2月のリニューアルで資料もさらに充実。蛇笏、龍太親子の魅力を存分に味わえる。

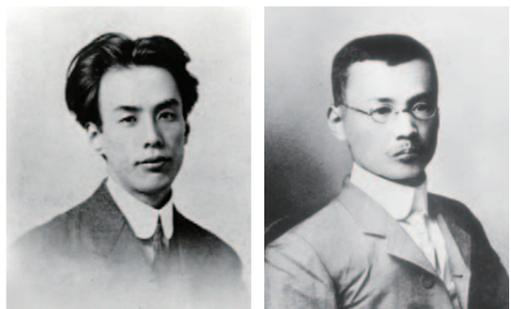
県立文学館 甲府市真川1-5-35 TEL 055-235-8080

山梨 文学館 検索

蛇笏自筆の額



代表句の一つ。
「いもの露
連山影を
正しうす」
蛇笏



交流があった頃の芥川龍之介(写真左)と飯田蛇笏(写真右)

蛇笏の生家(笛吹市)



蛇笏は笛吹市境川町小黒坂にある生家を「山廬(さんろ)」と呼んだ。庭にある樹齢300年以上の赤松は、今も当時と変わらぬ姿を残している。

※生家「山廬」は一般公開していません。

東京の俳壇から離れ
故郷山梨で句作

明治18(1885)年、東八代郡五成村(現・笛吹市境川町)に生まれた蛇笏(本名・武治)は、早稲田大学在学中、俳句実作グループ「早稲田吟社」に参加する一方、歌人、若山牧水や北原白秋らと親交を深めた。23歳で俳誌「ホトトギス」を発行する高浜虚子に入門。俊英として注目されてきたが、明治42(1909)年、東京の俳壇から離れ、山梨に帰った。

故郷で俳句を作る道を選んだ蛇笏は、山梨の自然や生活を詠み、たびたび「ホトトギス」の巻頭を飾った。

芋の露 連山影を
正しうす

眼前の芋の葉の上に露ははるかかなたには南アルプスの山々。露の玉と南アルプス連山の高くそびえ立つ姿の対照が鮮やかに描かれている。

蛇笏の代表作の一つとなった

月24日に龍之介が自殺。35歳であった。その死を悼み蛇笏は次の句を詠んだ。

たましひのたとへば秋の
ほたる哉

秋の蛍といつても8月上旬。青白い蛍の光の尾は、この頃になると特に哀れ深い。亡くなった龍之介の靈魂を秋の蛍に喩え、悲しみを表現している。

この句をしたためた蛇笏直筆の書も県立文学館の飯田蛇笏・龍太記念室で見ることができ

その後、蛇笏は重厚で力強い作風を確立し、主宰した俳誌

この句は、県立文学館の飯田蛇笏・龍太記念室に力強い筆跡の書額として展示されている。この句は作家、芥川龍之介が称賛した句でもある。

手紙や句で育まれた
龍之介との心の交流

大正7(1918)年の「ホトトギス」8月号に「我鬼」という俳号で掲載された龍之介の句を、蛇笏は龍之介とは知らぬまま「無名の俳人によって力作さるゝ逸品」と評した。これをきっかけに二人は手紙のやりとりや句の交換を行うようになった。

大正13(1924)年3月の俳誌「雲母」十周年記念号には、龍之介が「蛇笏君と僕」という一文を寄稿。夏目漱石の家で知人から蛇笏の句を紹介されてから、その素晴らしい句の数々に触れ、蛇笏の句の世界に惹かれていったと記している。

二人は生涯会うことはなかったが、深い心の交流があった。しかし、昭和2(1927)年7

「雲母」を俳壇の揺るぎない存在に育て上げた。戦中から戦後にかけては両親と3人の息子の度重なる死に遭遇するが、悲しみを乗り越え、やがて豊かな俳句の世界を実現していく。

晩年を迎えても、その創作意欲は衰えることがなく、一層の深まりを見せたが、昭和37(1962)年10月3日、77歳の生涯を閉じた。それから5年後の昭和42(1967)年、蛇笏の文学的業績を後代に伝えるため「蛇笏賞」が設けられた。蛇笏賞は俳句界で最も権威のある賞として、40年以上、俳句の発展に寄与している。

プロフィール

- 明治18(1885)年…東八代郡五成村(現・笛吹市境川町)に生まれる。
- 明治38(1905)年…早稲田大学入学。「早稲田吟社」に参加。
- 明治41(1908)年…虚子の句会「俳諧散心」に参加。
- 明治42(1909)年…郷里に帰り、田園生活に入る。
- 大正元(1912)年…「ホトトギス」雑詠欄復活。以後、この欄で活躍。
- 大正6(1917)年…「キラ」の主宰となり、翌7年に誌名を「雲母」に改める。
- 大正14(1925)年…「雲母」の編集・発行所を甲府に移す。後に自宅に移す。
- 昭和7(1932)年…第1句集「山廬集」刊行。
- 昭和34(1959)年…「雲母」創刊500号。
- 昭和37(1962)年…77歳で死去。